

宮間利之さんは、日本の戦後ジャズ界を牽引してきた代表的な人物のひとつだ。1950年に自ら楽団を結成して以来、60年以上第一線で活躍を続けてきた。昨年94歳にしてステージに立ち、熱意は衰えなかった。宮間さんと同世代のジャズ評論家、瀬川昌久さんは振り返る。

「初めて聴いた時、日本にもこんなジャズバンドができたと感じたことを思い出します。原信夫とシャープス&フラッツと並び立つ存在ですが、宮間さんは、より新しいサウンドを志していました。常に良いメンバーを入れて、高いレベルの演奏を継承する姿勢は、ずっと変わりませんでしたね」

21年、千葉市生まれ。生家は料亭を営んでいた。音楽を学びたいと、39年に海軍音楽隊に入隊する。日向や長門に乗艦していた。

原信夫さん(89)も海軍音楽隊の出身である。「軍で御一緒したことはあ

りませんが、宮間さんは先輩です。音楽隊は、音楽が専門で軟弱だと見られたものですから、余計に厳しくスパルタ教育で鍛えられました。宮間さんも音楽隊仕込みが基礎にあるからこそ、意欲むき出しの強さがありました。刺激的なライブとして、励みになりました」

宮間さんは復員する、



ツに属していた時期がある。「原さんのような華やかさはなくても、宮間さんは別格でした。朝鮮戦争の頃は、客に明日は戦地という兵士も多く、血がたぎり気が荒いのです。そんな場でも聴かせる力をお持ちだった」

53年から活動を共にし、ギターリストであり作曲、編曲も担ってきた山木幸三郎

意味でワンマンであり、情熱家で負けず嫌いでした」

ラジオやテレビの歌番組の仕事も喜んで引き受けた。「紅白歌合戦」や「シャボン玉ホリデー」など、活躍の場は枚挙にいとまがない。弘田三枝子の伴奏も多く手がけている。

「ジャズ以外でも新しい試みを面白がって工夫してい

AN INSCRIPTION ON A TOMESTONE 墓碑銘

ビッグバンドの魅力を広め、

戦後ジャズ界を支えた宮間利之さん

と、アルト・サクソスを演奏して、数々のバンドに参加。朝鮮戦争が勃発した50年にジャイブ・エッセを結成し、米軍施設などで演奏。58年から、17人前後で構成されるビッグバンド、宮間利之とニューハードを率いる。コメディアンなど多彩に活躍する世志凡太さんは、原信夫とシャープス&フラッツ

さんは述懐する。「メンバーひとりひとりのプライドを受け止め、皆を信頼して、とことん好きにやれと任せてくれました」

マネジャーの角田泰彦さんも言う。「バンドをまとめるというより、宮間さんのとてつもないエネルギーに皆がついてくるのです。昔から良い

ました。これはニューハードの演奏だな、と伝わったと思いますよ」(山木さん)

74年にはアメリカのモンタレー・ジャズ・フェスティバルに出演。オリジナリティーを絶賛され、翌年にはニューポート・ジャズ・フェスティバルでも反響を呼び、世界的に注目される。コンサートマスターを務

める川村裕司さんは言う。「宮間さんは、それ行け、と鼓舞するような調子でした。指揮をしようと、とてもよく動くので、ポケットから小銭が飛び出したりしたほどです。細かいことは言いませんが、ニューハード独自の重厚なサウンドを大切にしています」

ファンが2世代にわたるなら、親の跡を継いだメンバーもいる。ビッグバンドの楽しさを知って欲しいと、80年代から学校での演奏会を地道に続けてもいた。

90歳を迎えても意気軒高。肉を食べるのが好きだった。2012年には卒寿記念コンサートを成功させている。「音楽一筋だけに、耳が遠くなったことを悔しがっていました」(川村さん)

5月24日、老衰のため、94歳で大往生を遂げる。「最晩年は補聴器を使っていたが、機器を通した音を頼りにしているとはお客様に申し訳ないと言うほど謙虚でした」(瀬川さん)